



## 歩いていける地域で 話し合っつつくる福祉

「歩いていける地域で、住民が話し合っつつくる福祉のまちづくりを」と、社協が今年度から始めたのが「地域福祉推進支援事業(以下、支援事業)」だ。これまで2年間、市内25小学校区の自治協議会・自治振興会のうち6カ所をモデル地区に指定して活動費を助成し、今年度から本格実施に踏み切った。

支援事業の特徴は、単なる助成ではなく、自治協議会・自治振興会での福祉部会づくりとセットにしたこと。これにより、地域で住民が話し合っつつ継続的に福祉活動に取り組むことができる。また、社協が活動を決めるのではなく、住民が話し合っつつ地域に必要な取り組みを決めている。職員はせっせと足を運び、住民による福祉のまちづくりを支援している。

### 活動の中で

「住民同士、うだうだ言いながら集まるのが地域づくりの一步!」こう話すのは美和地区自治振興会の会長で福祉部会長でもある西安さん。9自治会で構成され約1,800人が暮らす美和地区は、2年前に支援事業のモデル地区となった。自治会の副会長が福祉委員を兼務することで、福祉部会の活動を自治会内にも浸透させることができた。

福祉部会では、自治会ごとに開催されている「いきいきサロン」の全体交流会「いきいき美和の会」をはじめ、介護者の

地域ボランティアも一緒に楽しむ「いきいき美和の会」



集いや介護教室などの交流・学習活動に取り組んでいる。

また、「向こう三軒両隣」の助け合いを進めようと取り組んだのが、「自治会ふれあいマップ」づくりだ。

自治会ごとに見守りグループをつくり、全世帯が日頃から、声を掛け合うために作成した。災害時の避難に生かすなど、福祉活動がほかの地域活動に波及効果をもたらしつつあるという。

今後の夢も膨らむ。統合する保育園跡地を活用し、「たたみにコタツを置いて高齢者や子どもが気軽に来られる場所をつくりたい」「悪徳商法に引っかかるよう、地域内でちょっとした困りごとに対応できる相談窓口もつくりたい」と会長は話す。「<sup>うま</sup>美し、<sup>なご</sup>和みの里」を合言葉に、地域の安心を地域でつくる活動が進んでいる。



自宅内の目につくところに張り出すふれあいマップ

### 活動のポイント 住民が集って話し合う場をつくることからまちづくりは始まる

#### 取材を終えて

市社協職員の言葉。「社協が事業を決めるのではなく、住民が事業を決めると思うと、社協の役割が見えました」。また、「住民意識や地域の土壌に合わせて社協は地域に関わり続けるんです」とも。地域への誇りや愛情、地域で暮らす安心を絶やさない覚悟を、住民と社協職員双方から感じました。

#### 会長から

丹波市社会福祉協議会 会長 足立 九一郎

丹波市では、合併時と比べると人口が約5,000人減少し、一部の地域では人口流出に伴う少子・高齢化に拍車がかかっています。一人暮らし世帯、高齢者世帯の増加、少子化に伴う高齢化などさまざまな福祉課題が地域の中には存在しています。

丹波市社協では、こうした地域にある福祉課題について、地域の人や物などの資源を住民自らが活用し、解決できるよう「地域福祉推進支援事業」を地域とともに進めています。

この事業を通して、「住み慣れた地域で暮らし続けられて良かった」といわれる仕組みづくりを進めていきます。

